

# 日本画制作と活動報告

Activity report and Making process of Japanese painting

西岡悠妃 Yuhi Nishioka  
宝塚大学メディア芸術学部 専任講師

## 1. はじめに

日本画とは主に接着剤となる「膠」、支持体として使用する「和紙や木材」、「岩絵具」で作成された絵画を示す。

筆者はその制作の中で人物の肌を乳白色で表現することを主軸とし、画材や筆圧の研究を行なっている。その研究発表である個人展示と公募展への出品などの取り組みについて報告する。

なお、本報告は本学へ入職した2021年6月～2022年8月までの取り組みについて述べるものとする。

## 2. 「日本画材における乳白色の肌の技法研究」への経緯

洋画家藤田嗣治の人物の肌の表現は、その材料や描法の多くが未だ謎に包まれており、使用された道具の中には面相筆や刷毛、白の顔料や墨などといった日本画で使用される材料が多く見受けられる。粒子が細かく、重ねると独特の艶や質感を表現出来る日本画の彩色方法には、藤田が表現した様な乳白色の肌を再現出来る可能性があり、またその研究によって岩絵具の描法も広がるのではないかと考えた。また、筆者の作風が人物画であるとともに心象を内包した抽象画の側面も持つことから、肌の表現を追求することで心象表現の幅も広がるのではないかと考え、表題の研究へ至った。

## 3. 肌の表現へのアプローチ

肌には粒子の違う岩絵具を混色して水分量を多くし何層も薄く刷毛で画面に塗布する。完全に水分が飛んだら紙やすりの細かい番手を使用し、肌の表面を滑らかにする。この工程を繰り返すことで肌の繊細な表情が出て上に施す表情の描写がより際立つ。ただ画面全体で見た時にこの肌の表現に1番目がいく様に視線を誘導したいため、肌以外の部分を小さいタブローなどで計画する。(図1～6)ここではなるべく本画制作で手順がタブローと同じになるよう細かく準備する。



(図1) 大きく絵の小下図を見ながら下塗りする



(図2) 上から白めの色をかけるため画像編集ソフトで色を反転させマチエルの様子を確認する



(図4) 人物を乗せてまわりのバランスを見る



(図3) 白めの混色した色をかけ、下地の凸凹をマチエルとして出す



(図5) 人物以外のモチーフも入れてボリュームやバランスを見る。



（図6）モチーフが揃ったら転写し、  
上から1色かけて目線を人物にまとめる

図1～6をタブロー1として画面に納得がいくまで何点も制作する。肌の部分は仮で暗めにしてあるので肌の部分も本番の様に制作したものを作り、タブローと合わせて1番肌に目がいくものを選ぶ。

#### 4. 研究発表である個展、グループ展、公募展への参加

2021年7月30日～8月1日 千葉そごう秀美展 個展  
8月6日～8日 千葉そごう個展  
9月1日～17日 再興第106回院展 上野東京都美術館  
9月10日～12日 横浜そごう十稔会 個展  
9月14日～20日 横浜そごう 個展  
9月15日～20日 大宮そごうアートフェア個展  
10月2～3日 沼津 催事個展  
10月10日～11日 池袋西武 逸品会 個展  
10月20日～27日 「梅の会」長江洞 岐阜 グループ展  
10月20日～26日 池袋西武 個展  
11月6日～7日 西武高輪会 大阪 個展  
11月11日～14日 西武高輪会 品川プリンスホテル 個展

11月19日～25日 渋谷Sta.レストラン個展  
2022年2月24日～3月9日 ナカジマアート銀座 個展  
4月6日～12日 「WAVES」same gallery 東京  
グループ展  
4月6日～8日 「WAVES」Lian 大阪 グループ展  
4月6日～24日 「WAVES」C7C gallery and shop 名古屋 グループ展  
4月7日～17日 「WAVES」haku kyoto 京都  
グループ展  
4月23日～30日 「WAVES」ie 北海道 グループ展

#### 5. その他活動、受賞

- ・前田青邨中村奨学会 授賞式 過去受賞者として参加
- ・日本美術院 奨学金受賞
- ・日本美術院 再興第106回院展 大観賞受賞
- ・国宝 伴大納言絵巻 模写事業参加
- ・YouTube 東海オンエア「岡崎市内限定で100万円を使い切る」企画作品参加
- ・美術の窓2月号「デッサンを極める」作家による技法講座特集 デッサン指導（図7）



(図7) デッサン特集に寄稿

することと、展示空間をより効果的に見せるために今後はライティングの光度が絵肌にもたらす効果の実験を行う。会場に流す音楽のジャンルも、今まではクラシックなものが多かったが、現代日本画の表現をより大胆に演出出来るよう引き続き会場のシュミレーション模型などを制作し研究していく。



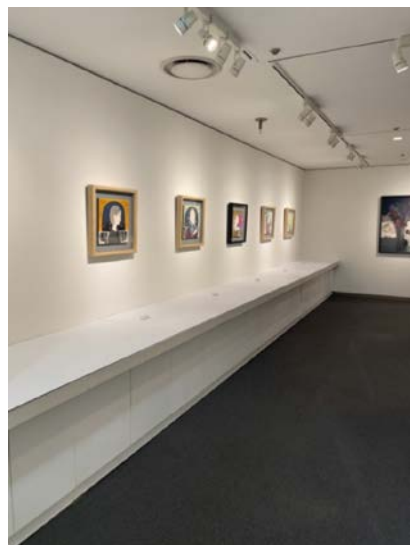
(図8) 個展のDMは写真撮影など筆者自身で行う

## 6. 今後の展開と課題

様々な個展やグループによる企画展を経験する中で絵肌の研究と同時に会場構成の重要性を実感し、より研究テーマを1つの展示として見せるために必要な手段や展開が明確になってきた。本年2月に行なったナカジマアートでの個展は、より会場構成を意識し、照明を暗くしたり音楽を流したりすることで絵の肌の白さや透き通った様子を強調出来た展示となった。ただギャラリーは会場が狭いことが多く、限られた空間で見る順番を滑らかに誘導出来るまでには至らなかった。

これから乳白色の肌の表現研究も引き続き行なっていくと同時に研究発表の場でもある展示の方法や規模、テーマの設定をより精査し、完成度を上げていく工夫が必要である。

滑らかで血管の透き通る肌の表現を油絵の技法から応用して日本画材に落とし込み制作



(図9) 通常の百貨店展示風景





（図10）会場構成を実験的に行なった個展

#### 参考文献

藤田嗣治画集 素晴らしき乳白色（2002年）講  
談社 藤田君代監修 尾崎正明、清水俊男編集